

新聞記事を活用した現代社会「私たちの生きる社会」の指導 —「2045年の社会」の構想に向けて—

愛知県立岡崎高等学校教諭
鈴木 俊喬

1. はじめに

(1) 新聞離れ・資料収集の技能不足

若年層の新聞離れが進んでいる。「平成29年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」によれば、10代が平日に新聞にふれるのはたったの3.6%である。これにはさまざまな要因が考えられるが、インターネットやスマートフォンの普及により、それらから情報を摂取できるようになったことが考えられる。

このような傾向は、本校においても同様である。本校には社会への関心が高い生徒が多く在籍するものの、それでも新聞から積極的に情報を摂取できている生徒は少ない。2016年に、本校の1年生160名を対象に新聞に関するアンケートを行った(表1)。アンケート結果によれば、新聞を毎日読んでいる生徒は18.1%である。また、政治・経済・社会面を毎日読んでいる生徒は全体の11.3%であった。

若年層の新聞離れが続けば、信頼性が高く、かつ手元にある情報源をもとに、みずからの意見や立場を考える機会が少なくなってしまうのではないかと。新聞はメディアのなかでも信頼性の高い媒体である。また新聞は、テレビと比較すると手元に残しやすい情報源である。このような特徴を持つ新聞にふれる機会が減ってしまうと、さまざまな時事や論説にふれることで、自分の価値観や社会のなかでの立ち位置をとらえ直したり、自分の意見を形成したりすることができなくなってしまう。

新聞離れの影響は、本校では主題学習における成果に表れてきた。本校の「現代社会」では、科学技術がもたらす社会問題に関してディベート学習を行ってきた。生徒はこれらに意欲的に取り組み、よく調査をしている。しかし、基本的な事実や論点を押さえられていなかったり、ディベートの際にインターネット上の出典不明の資料を用いて持論を主張したりすることが度々見られるようになってきた。若年層の新聞離れが資料収集の技能低下につながっているのではないと思われる。

(2) 科学技術がもたらす新たな問題

近代以降、自律的な個人が幸福追求のため自由に行動することが認められてきた。人類はその活動の成果として生まれた科学技術を自由に活用し、社会を発展させてきた。

しかしその負の影響として、地球温暖化をはじめとする地球環境問題が現れてきた。地球環境問題の解決については、さまざまな困難を経験しつつも、地球環境に負荷の少ない科学技術の開発や、国際的な協力体制・枠組みの構築といった方向性に関して一定の合意が得られてきた。しかしこれらの方向性は、近代以降の社会の原則を変えるものではなかった。

これに対して近年の科学技術は、近代において想定されてきた「自律的な個人」を再考せざるを得なくするものとして出現し始めた。人工知能の性能の向上は、人工知能に支配される「他律的な人間」の可能性をもたらした。さまざまな医療技術の発達は、「かけがえのない個人」を、「操作・改変可能な人間」に変えられるようにしつつある。近年の科学技術の発達は、「幸福、正義、公正」の基盤となる「人間」を問い直さざるを得ない状況にわれわれを追い込んでいる。

また近年の科学技術の発達に対して、社会における問題解決の方向性どころか、科学技術導入のルール作りさえもまだその途上にある。例えば、自動運転技術に関する法整備の検討がよい例である。

「現代社会」の最初の大項目「私たちの生きる社会」では、現代社会の諸課題として、生命、情報、環境などが扱われることになっている。そして以上のような背景からすると、これからの社会での「幸福、正義、公正」を考える際には、人間そのものを問い直さざるを得ない。さらに、まだ問題解決の方向性も定まっていない近年の科学技術を扱う方が「幸福、正義、公正」を考えざるを得なくなるので、より適切である。これを主題学習のテーマとすれば、より高い教育効果が得られるだろう。

2. 「私たちの生きる社会」の構想

以上のような背景から、2017年度の「現代社会」の「私たちの生きる社会」の指導において、新聞を活用した主題学習を企画・実施した(表2)。主な手立ては、新聞を資料として活用する「ディベート学習」、「マイスクラップ」を通じた新聞記事集め、そして振り返りを通じた「2045年の社会」の構想の3点である。

(1) 新聞を資料として活用する「ディベート学習」

ディベートは「ディベート甲子園」(全国教室ディベート連盟主催)の形式に準じて行った。

ディベートのテーマは、①自動運転、②ビッグデータ、③再生医療、④生殖医療、⑤VR(ヴァーチャル・リアリティ)の五つから一つを選択させた。4月の最初の授業で、班編制とテーマ選択を行った。テーマを選択させる際には、これらが人間社会を大きく変えうる科学技術であることを伝えた。

5月下旬からディベートの準備をさせた。それまでに、以下で述べる「マイスクラップ」の週末課題において、ディベートのテーマに関する新聞記事を集めさせた。ディベートの準備の際に、集めた新聞記事を持ち寄り、交換し合い、テーマについての情報を共有させた。

(2) 「マイスクラップ」を通じた新聞記事集め

「マイスクラップ」とは、「現代社会」の週末課題として1年生全員に取り組みさせている新聞スクラップの課題である。

生徒は週末に新聞を開き、気になった記事を見つけて、それをプリントに貼り、記事の感想を書く。そして、次の月曜日にそのプリントを隣の席の生徒に渡して読んでもらい、記事や感想についてのコメントをもらって提出する。これにより、生徒はクラスメートが気になっていることや考えていることにふれることができる。

先に述べたように、1学期の間は「マイスクラップ」のお題を「ディベートのテーマ」にして、新聞記事を集めさせた。これを通じて、その新聞記事からディベートのテーマについての知識をつけさせた。またディベートにおいて、新聞記事を資料として引用できるような環境を整えた。

生徒はディベートの準備の際に「マイスクラップ」

で集めた新聞記事を交換し合ったり、机の上に広げたりするなどして、テーマについての情報を共有していた。そして6月上旬から実施したディベートの際には、多くの生徒が新聞記事を引用して、事実に基づいた説得力のある議論を展開させていた。

(3) 振り返りを通じた「2045年の社会」の構想

振り返りのために1学期の期末考査では、「『2045年の社会はどのようになっているか』そして『2045年の社会はどのようになって欲しいか』について、それぞれ160字以上200字以内で記述せよ」と出題した。そして、その回答を少人数のグループで共有しつつ、振り返りを行った。

生徒は「2045年の社会はどのようになっているか」の問いについて、科学技術を通じて便利になったり、経済発展したりしていると予想する一方で、人間が科学技術に頼りすぎたり、雇用が奪われてしまったりするとも考えた。

このような展望に対して、「2045年の社会はどのようになって欲しいか」という問いでは、「科学技術による便利さがある程度享受しつつも、科学技術に支配されず、人間らしい生活が送れること」という回答が見られた。

以上の回答をふまえたうえで、「2045年の社会に対するあなたの関わり方は？」という問いを提示した。この問いに対して生徒たちは、科学技術に頼りすぎないために、「科学技術に関する知識・情報を深める」「自分の考えを持つ」「人や地域との関わりを大切にする」と回答していた。

3. 終わりに

生徒たちは、近年の科学技術の発達が人間社会を大きく変えうるという意識をよく共有し、将来のことを自分の問題として意欲的に追究していた。ただし、既存の価値観を問い直すところまでは達成できなかった。新たな価値観を構想するところまではいかなかった。この課題を実現するために、授業展開のさらなる工夫に取り組んでいきたい。

表1 新聞との関わりに関するアンケート結果

新聞を 読む頻度	毎日	2, 3日に1回	1週間に1回	読まない	
	18.1%	20.0%	35.0%	26.9%	
新聞を 読む部分	すべて	政治・経済 ・社会面のみ	テレビ欄または スポーツ欄のみ	読まない	その他
	28.1%	16.3%	21.9%	26.9%	6.8%
新聞を毎日 読む人(上 記18.1%) が読む部分	すべて	政治・経済 ・社会面のみ	テレビ欄または スポーツ欄のみ	その他	
	7.5%	3.8%	5.0%	1.8%	

表2 「私たちの生きる社会」の指導計画

時期	段階	時数	学習活動	
4月	問題を知る	1 2～6 7	ディベートの班分け, テーマ設定 講義: 環境問題, 生命科学, 情報技術について 中日新聞社による出前講座: 「わくわく新聞講座」	新聞記事集め 「マイスクラップ」を通じた
5月 6月	問題に取り組む	8 9～12 13～17	模擬ディベートによる役割分担, 流れの説明 ディベートの準備 ディベートの実施	
6月 7月	問題を自覚する	18 19 20	期末考査における論述「2045年の社会について」 振り返り①: 2045年の社会の展望 振り返り②: 2045年の社会と〈わたし〉	

発行所 数研出版株式会社

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2丁目3番地3

〒604-0861 京都市中京区烏丸通竹屋町上る大倉町205番地

〔電話〕代表(075)231-0161

ホームページ <http://www.chart.co.jp/>2018年11月 発行
(年2回発行)本書は植物油インキ
を使用しています。